



門遠18
番 1888
巻 4

改

印

八三

忠義水滸傳ハ羅貫仲の世卓著する英すと
 以て大に精神を費して著せしものか其
 妙巧奇絶諸名子に賞嘆する所也小説第一
 乃書ゆすに論れ後世に続水滸傳後水滸傳
 然化の事豈に多し擬し得ぬ也我邦
 涼備形ふ者の著せし本朝水滸傳あり作意
 乃巧拙し其文辞上世の体擬し事理ハ
 識者の安んよみを到るべし僕前年女水滸

傳でんといふを書かけりしめして例れいの跡あと頼たのみ任まかせ草くさを
 漫まん筆ひつ餘あまふ鄙ひん信ぞくなきこと人ひとも見みる次つぎ之の引
 包かひ屋やに投なげし一日いちにち及および古ふる代しろ尋たづね探たづね序ついでに
 出いでし折ありし書しよ質しよ未まだ是これを見みる日本にっぽん水すい滸へん傳でん
今呼坂東忠義傳
 題だいきり出いし此こ書しよ見み女にょもよき通とすこと今
 世よに行ゆく君きみはさるるもむし紙し魚う子こ飽あめむ
 ちりちり我われ子こと云いふ頼たのみおとすも時とき得えず我われ子こ等らに
 化くわ者しやも有ありしと云いふ笑わらひ終つひに話わを寅とらの初はつ妻つま伊い丹たん椿つばき園えん述じゆつ

女水滸傳目錄

第一回

極たぎ秀しゆ錦きん浦うらと罵ののち羅ら子し沈しんむ
 玉たま園えん謀ぼう計けいを須もとむ恨うらみ被かさ

第二回

玉たま園えん配はいを得えて城じやう棠たう子し留とどる
 沈しん岳がく儀ぎ子し從したがひて變へん國こく子し赴おもむく

第三回

大おほを乃のち衆しゆ鬪とう戦せんを如ごとく
 水みづを潜ひそりて獨ひとり躰たう避ひをうり

第四回

瓊しるの浦うら姉あね妹いもうと危あやしむを此この事こと
 墨すみ乃の以もつ親おや子こ違ちがふこと喜よろこぶ

第五回

朝路夫を欺つて恨僕を通し
事而父を失ふて継母を害す

第六回

熊人衆賊を従へて寨を閉す
春兩諸婦をばらけ山を出る

第七回

僧院を過り毎ひと少く
妓館を弄り重く黨を集む

第八回

乱り衆一に始り塞國を掃
危きと程に孫駒岳に帰す

女水滸傳目錄終



女水滸傳卷之一

第一回

極秀錦繡を買ひて羅を洗む
玉園謀計を須く恨を報す

話說後花園院の法字空女は、泉州沙界の津
子柙下極秀と云ふ者あり極秀あり力量世に捨き俠
氣美を以て人の為に仇を報し恨を解む弱きを助
け強きを碎く事よく能ふに、家も有る同志の友も
あり、更にも結ひ日酒を飲まむ好む遊言もあ
り、其妹は玉園と云ふ所の安容艶麗標致事好むも
あり、俗例に心を見向く使字強く、極秀も
婦女の態と好む事なれば、都に男子の如くあり

よき徳の氣色見しは、
入しよもは、
何年迄も、
早く、
宵、
一、
持、
子、
と、
其、

會得を、
従、
却、
水、
道、
辱、
辱、
隙、
曰、
知、
矣、



少ふ一人の妹を送るべくんや早く帰る世を回
まき子泣き下りし雷のどくし一階八怒て刀
よを引くごとく就き鵬乃燕雀を扱もさるが如く形れ少
しも動くことを得む頭をかへく這々途かへる玉園
まは船を恐む留めんとして一ど力乃を如何せん
ド頼一がはく極秀を初めて早く世池を返まさん
母を如く思ひ居る子相立日遠く遠國の者として
一人の男は腰裏へく冬衣はせる体もさるが如く其を
肥前雪乃者めくはの縁由ゆりて座船に積る錦
繡茶石の類いと多く買取此津よりく交易せん
船を浮のまりに難風を逢く載るる所乃貨物悉

海子にのみき人傑く命を賜り儀子海に寄る一丈
乃錦を拾ひ取く此津にまきり賣く岸路の盤纏は
きんくきんく家をも持廻るもまきりを儀する海を
きんくきんく物やいんと疑ひて更なる人なり價の
下も論ぎはひも求めたまはくはくきんくを感へく海
を流し平を命をくむむ切るまきりえま人乃窮迫を
救ふくは好む極秀はまきりきんく思ひ用るるもきん
囊中より所を奪く金之片を出し其錦を買取めは
きんくまきり人なまきりきんく思ひ謝して海にけりかてまきり
乃きんくまきり極秀は面置懐し一破乃極捕解りまきり
く賊黨極秀が家とまきりまきりまきりまきり極一極

圖書が一冊あり早も我を羅子に引こするらん心付
今、羅子とて終るも能く思ふ候に捕り殺すを斬殺
一かあるがも自害せん光るも白刃をふる門外に
出迎づく者二人を夫を斫倒し逃るを退くを下平
まらしむ思ひあはるる後より鍵繩を足す抄く候し
去勢の重くくも少く縛りて圍く公廨へ引出
せば圖書の衆使乃上り坐し極秀を見ん地をふらち
笑ひは及公乃制極を犯し竊に寧國を渡海し貨
物と交易しまらるる此津に於て奪拂ふ事ありは
上圍に達し其黨類西之人を誘く捕るとしても未
魁首ある者を探り得ど汝も同黨あるより逃る

魁首の所を白状せし刑罪を赦免し今も極秀
去り怒り汝を我妹とてを恨み死なれ者と捕へし
實は罪と謂ふも言せんすは此無主徳のありあり
武を以て何ぞ自らもと下りてを討つ我を人と捕
へん衆人を引向しお雷極と思ふれんと云ふに
しむきせ圖書の自若として下まを呼出し前も我今
如く彼が家内とてし檢覈しありや尋ねば下ま一は
錦を出一外は煙しき物ハ守是乃く不審なるあり
はしとて圖書の少く候に候候し是をこれ波羅遮國
あり織室の綿ふり希世の珍なるに價甚く高く候し
彼等如きは不持とてす物も難く彼等不渡海して来と

欺き交易し来りし遠くの一か所津橋ありても程
低頼んと欲せし白服身を極考し後ハ昨日雲水
も中と述んと欲もさしこし不女計子溜りさし
たゆへと懸張が辨とぬふも中も逃りて西のぞく次
と道徳を窮め才を儘く詞を弁をばき血一齊に
声を揚するは儀首の五所を白状さし雲々於列殿
元表を加ふれざしも勇極る極考も考さし
予も息も絶んをす斗り如きハ重く又鞠回をなす
固固より遊遊も不刑罪をせん前もや思ひんを
舌嚙断く矢くさるる玉固も見捕らさし
あまのやと近隣の者公命と遊りて守りたまはる

かく見ん女を聞くと心は任まぬ急や自棄に
一衣燈下子に座しありしに忽ち極考が安隠を
もたれハこの世を帰て来りやと極考の詞をか
さしハ早秋もたけ清兵衛のしめ玉固に見さし
世と去り事と知りおまを極考も大不歸哭りし
心付もさし其の言とせんや何卒圖書を極考に
報せん其亡霊乃喜ぶ所なりと極考の言極考
懸河段内の方へ書簡をきし一人乃見んこも重飛と
杞もさし死刑地獄に極考も極考も極考も極考も
孤獨の身とさし首の罪と極考も極考も極考も極考も
後ハ其の遇と極考も極考も極考も極考も極考も

いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ
いふつゝ心もあはれしくしつゝ六段内誅しつゝ

て後乃小門より入る白石亭樹下布衣坐し
過一園の別廬下玉室六園書共茫然と繡褥を
曲几を置り侍兒小鬟と酒を酌居らる玉園世
盛饒濃粧風流を垂しをれど容色常に隘し面を
さす玉園之を酒をぬれを許すふ及と醉
生す玉園の輕調微笑し玉書子教を以て
半夜乃至て寢を止む玉園書を大に
く皆く別廬を去る玉園書を大に
て御居る玉園書を大に
をたす玉園書を大に

玉園ハ仕標をとりて喜ぶも人如く家内
能く探りし事ハ何れも懐疑を致し
刺貫んて時同書忽ち身を結
事も何んぞと詭伺く執膳の体
あつと女も兄が泣き從く地獄
ハ死をも加へて飯死成ひやん
暗鬼の至ると泣き悔く我ハ心
勇まき事あるまじき事
んとてふ勿れと屏風乃
乃大漢野史を披き見を以て
再ひれどもとて能く
玉園配成得く賊巢あり
龍岳淺く値く蠻國を赴く

て斬伏るをとりて其懐一
玉園配成得く賊巢あり

第二回

玉園を助す力有り若し向ひ君
鴻恩謝すも下を如何と謂
恥づき事ありて害せん為
力を盡しねとまてお蔵
海に居まて久し君も海
方子もあらとありて

公方の役人と言ひしをれを追捕教へて其の裸體とせしむる
身おもひやくとて寝ぬく自害をんと思ひ給めいしとて君がえり
仍と捕らんとするハ果を君の及ぶとて思ひしとて言ふ
者れ曰く事ハ少しも憚る所無し未だ棲ハ是より程遠
らんとてしむるに後更文より事ハ如きれば何れ我れ
しも事ハ無くハ中むしやとて強て助ふる玉國公今恩
を更しよふに必死にきりぬく勇氣感ふる事ハ多物
乃歌中にも單身赴んと欲する心ありぬめ何れ所
付ふやん中より難く事ハ固くも辞を以て河子從ハハ
者も事ハ無く首より後乃門を穿れ出せハ河子從事ハ
事も事ハ無く人の男侍人なり侍も不居とて近づき何れ

語ハ男一散りまきりて何れをたぬく去るるやぞ一挺の
薬をかこもきりてとんととん動む玉國公とて河子從
もも須臾の間は崎廻る山砂と登りて事ハ無く事ハ
出く見事ハ無く如く如く如く如く如く如く如く如く
門庭清静なりとて肉を厚障子を敷きとて奥深く武
具も事ハ無く見も事ハ無く事ハ無く事ハ無く事ハ無く
棲りてしむるに程なく始乃男衣服を改めしむるに
色白く眉清く眼中明く唇赤く鼻直くと合事ハ如く威
く長高く文字碌々人物ハ人ハ人ハ人ハ人ハ人ハ人ハ
さる奇遇なりと程なく物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
續く二平餘り如く女乃容貌侍も事ハ無く事ハ無く事ハ



流子渡りく竹女を御公持運ひて舟に別れりて女命
秘しき自ら龍岳とてけしめ女子の外に宮はへち若あり
いやはれの縁もく健むるまをく宿好きば後く格を
まよふ若く空に懸りてまよふ主人命しりて酒と物
ふりて良人くくくしか乃女を遠ざけ侍出くよるま
涙指主人の若く公命とてまよふ大宮命はへち
乃水邊をく縁好きまをく暇を乞ふまの世を過し過を
樂くまをく一はまをく福迎あれど折くし境界よりは序
君と見逢えぬ物と集くまをく忘るる縁のりひごまをく
便りも御公とてまをく一はまをく今まをくまをくまをく
まをく我も侍もく候りぬ思ひを流す時にも西り事

とまをく船はまをく一はまをく船を擲ひ詞を以てに只流
るまをくは御國も年によまをく二平に及びまをく春情少かた
まをく心よ通ふ方おろくまをく一はまをく一はまをく今若く
公命は侍もく一はまをく好漢も十分必勤まをく一はまをくおき
まをくまをく人の思ひく失く便りおきまをく身かまをく心
まをく長くかまをくひたまをく涙あまをくまをく角もまをく言
まをく流し出はまをく八命も通ずまをく一はまをくまをく一はまをく
物もまをくまをく我も小男もまをく一はまをく一はまをく一はまをく
んと竊よ麻下乃若く危るまをく若くまをく守るまをく一はまをく
日子はまをく一はまをく一はまをく一はまをく一はまをく一はまをく
一はまをく一はまをく一はまをく一はまをく一はまをく一はまをく

申く侍アキ人んと滑一の二回の子自者をゆれ
ゆくとゆくとけきハ玉國ハ明暮侍法と深く憂
遍まも雁乃翼おと介はは通とては
たつりある

女水滸傳卷之一終

111
112
113
114
115
116
117
118
119
120

